

平成21年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢辰巳丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策等)
1 学習指導、進路指導の充実 (個に応じた指導により、基礎基本の定着と学力の増進を図るとともに、チャレンジ精神を涵養しながら、各コースの特性を活かした進路指導の充実を図り、生徒個々の早期の目標の設定を促す)	授業の改善と、基礎学力の充実 教材を工夫し、わかりやすい丁寧な授業を実施する。	先生の説明が分かりやすいと答える生徒が、 A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C 生徒のアンケートでは63.4%であった。	同じような問いを「授業評価」の中で、生徒の自己評価と合わせて行うと、約80%が分かりやすいと答えている。 学力差のある中で、全ての生徒に合った授業を実践することは大変難しいことではあるが、さらに工夫が必要である。
	前・後期、各1回校内公開授業週間を設け、研究授業・研究協議会を充実する。また、研究授業における協議内容を全職員に報告する。	公開授業週間等を利用して年間の授業参観数の平均が A 5回以上 B 4回以上 C 3回以上 D 3回未満  各教科で研究協議会を行い、その報告を、 A 全教科で行った。 B ほぼ全教科で行った。 C 半分程度の教科で行った。 D ほとんどの教科で行われなかった。	C 教職員のアンケートでは、3.7回であった。  A 前・後期に、全教科でテーマを決めた研究協議会を行い、その報告も行った。	年間2回実施している授業互見週間において、見学回数が4回以上の目標を達成した割合は、57.5%であった。 授業を見学することも大切だが、よりよい授業となるための忌憚のないアドバイスを互いに出るようにしたい。  各教科毎、テーマを決めて授業互見週間に望み、その後の研究協議会の内容を報告してもらい、職員会議で共有出来た。 この取り組みは、十分に達成された。
	家庭学習の定着をねらいとする効果的な課題を与え、家庭学習時間を増加させる。	課題の提出率が A 80%以上である。 B 60%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。  各学年が目標とする家庭学習時間を満たす生徒が、 A 70%以上である。 B 50%以上である。 C 30%以上である。 D 30%未満である。	B 生徒のアンケートでは67.8%であった。  D 目標を達成したのは 1年 22.0% 2年 18.6% 3年 32.7% であった。	昨年よりは少し上がったが、まだまだ提出率は低く、家庭学習時間の少なさと関係のある項目であり、課題提出の内容を深める指導も含め、さらに高い目標を掲げて取り組みたい。  平日の家庭学習時間の最低目標を、1・2年生は1時間、3年生は2時間と設定したが、結果はまったく低いもので、授業の在り方の研究、授業改善と合わせ、家庭学習時間の増進への取り組みが必要である。
	進路指導体制の確立と目標の早期設定 キャリア教育を充実させ、高校生活における個々の目標を設定させる。	本校に入学して良かったと思う生徒が、 A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	A 生徒のアンケートでは71.4%であった。	各学年での取り組みの成果が表れている。総合的な学習の時間を活用したキャリア教育の充実や社会人等による講演会も推し進めて行きたい。また、進路実現や部活動の充実なども大切であり、満足度をさらに高められるような、学校全体の協力が大切である。
	個人面談等を効果的に活用し、進路目標の明確な設定を図る。	具体的な進路目標を持っている生徒が、 A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	A 生徒のアンケートでは72.7%であった。	担任による個人面談がきめ細かく頻繁に行われ、また進路ガイダンスも適宜実施され、生徒の進路意識が高まってきている。
	個に応じたきめ細かな指導により、成績上位層の学力の増進を図る。	成績上位者及び成績上昇者の増加が、 A 全教科においてみられた B 半分以上の教科においてみられた C 半分以下の教科においてしかみられなかった D ほとんどの教科でみられなかった	C 1年生はA、2年生はC、3年生はDであった。	3年生の成績上位層の増加が見られず、推薦入試に依存する傾向が続いている。 補習や添削の在り方を再度検討し、上位層を意識した取り組みを実施したい。
	チャレンジ精神を培えるよう3年間を見通した小論文指導を行う。	小論文指導に積極的に協力できたと答える教員が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	D 教職員のアンケートでは、60.0%であった。	推薦入試における金大合格者が5人という形で、小論文指導の成果は出ているが、指導者がまだまだ限られた状態であるので、今後は小論文指導の研修会の内容・方法をより馴染みやすいものにした。
	学校関係者評価委員会の評価	家庭学習の目標時間が決して多くはないのに判定基準がDとなっており、放課後残して学習させることも含め、家庭学習時間を増やす手立てが必要である。また、課題の提出率もまだまだ低いと思われるが判断基準がBであり、やや基準が甘いのではないかと。授業評価については、一部であっても説明がわかりにくいという生徒の声を聞いて欲しい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	新学期早々、各学年ごとに家庭学習時間の目標を掲げ、5月までの指導を徹底する。特に、1年生に対しては学習指導の習慣づけを各教科が協力し徹底する。また、それと平行して適宜、進路ガイダンスを行い、早期に進路目標を持てるよう指導する。生徒との個人面接はその都度、目的を明確にして行い、個人記録をきちんと残す。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策等)
2 望ましい生活習慣の確立 (通学マナーをはじめとする社会規範を守り、遅刻や欠席を減らし、登下校時等の挨拶を励行するなど、基本的な生活習慣の確立を図る)	基本的な生活習慣の確立と社会的規範意識の育成 バスの乗車マナーや自転車マナーの向上を目指す。	自分自身の通学マナーが良いと答える生徒が、 A 80%以上である B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A 生徒へのアンケートでは 89.5%であった。	概ね通学マナーは良好であったが、常に100%を目指したい。 また、今年度も自転車による危険運転の苦情が時々よせられたので、安全教育の重要性ともからめ、マナーの向上に努めたい。
	家庭との連携を図りながら、服装、頭髪、化粧などの身だしなみ指導(生徒心得の遵守)を全職員で行う。	自分自身は、服装容儀について生徒心得を守っていると答える生徒が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A 生徒へのアンケートでは 80.8%であった。	全職員が生徒指導に対する共通認識を持ち、一丸となった指導をさらに推し進めたい。
	「遅刻防止週間」を毎月1回以上設け、遅刻半減を目指す。	遅刻者の延べ人数が A 800人以下である。 B 1000人以下である。 C 1200人以下である。 D 1200人を超える。	C 延べ人数が 1020人となっている。	立地条件の悪さはあるものの、1月の積雪により遅刻が急増してしまった。「延べ1000人を切る」と、無遅刻50日以上」を来年度も目標に掲げたい。
学校関係者評価委員会の評価	遅刻について、立地条件の問題もあると思うが、他校よりは多いということであるので遅刻防止の取り組みを引き続き強化してもらいたい。 また、挨拶やマナーについても、まだまだ元気が足りないように思える。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	遅刻の原因を分析し、遅刻常習者を減らす。 また、挨拶やマナーの指導は、教師側からの声掛けを大切に、引き続き粘り強く行う。			
3 心豊かな人間性の育成 (自主・自律の建学精神のもと、ボランティア精神や環境保護の精神を培い、地域社会から信頼される心豊かな人間性の育成を図る)	地域社会から信頼される心豊かな人間の育成 人間としての在り方・生き方の自覚を深める教育を実施する。	構成的グループエンカウンターやアサーション等を通して、人と人との接し方について考えを深めることができたと感じる生徒が、 A 80%以上である。 B 60%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。	C 生徒へのアンケートでは 54.6%であった。(但し、分からないが21.5%)	「構成的グループエンカウンター」を1・2年生については、年間2回ずつ実施できたので、人と人との関わり方について理解を深めさせることができた。しかし、3年生に対する取り組みは不十分であった。
	地域に根ざした学校づくりを推進するため、生徒会が中心になり奉仕活動を展開する。	ボランティア活動へ積極的に参加している生徒が、 A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 50%未満である。	D 生徒へのアンケートでは 42.7%であった。	活動に参加する生徒とあまり積極的でない生徒に意識の差が見られ、学校全体としての取り組みに弱さが見られる。 生徒会が中心となって積極的な参加を呼びかけるとともに、ボランティア講演会等を実施し、奉仕活動の意義を理解させる。
	「学校版環境ISO」の取得校にふさわしいエコ活動を展開し、CO <sub>2</sub> の削減を目指す。	エコ活動の取り組みに積極的であると答える生徒・教職員が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	B アンケートでは生徒が77.3%、教職員が85.0%であった。	エコ活動に対する取り組みは概ね良好である。 詳しくは、ゴミの分別処理は良好であるが、不要な照明を消す取り組みは、まだ徹底していない。
学校関係者評価委員会の評価	むずかしいこととは思いますが、道徳教育の成果が出ているか。 様々な取り組みを通して、人の話をしっかり聞く耳を持った生徒を育てて欲しい。 エコ活動について、その実践結果がより具体的にわかるような提示をすることが大切である。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	学校行事や講習会だけでなく、授業も含め、あらゆる機会を通して、人間としての在り方生き方を考えさせる。 家庭や地域との協力をさらに大切に、地域社会の中で生徒が育つ環境作りを目指す。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策等)
4 部活動・生徒会活動等の活性化 (部活動・生徒会活動を通じ、たくましい心と体を培い、積極的に活力有る人間の育成を図る)	部活動・生徒会活動等の活性化 1年生には全員部活動に参加するように促すなど、部活動を活性化させる。	部活動に加入している生徒の参加率が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	B 生徒へのアンケートでは、77.9%であった。	部活動の加入が約90%の中での参加率である。特に大会直後や冬季期間での参加率が低い。来年度は各部で数値目標を立てるなど、高い参加率となるよう取り組みたい。
		部活動活性化への体制作りが強化され、部活動が活発になったと答える教職員が、 A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	A 教職員へのアンケートでは75.0%であった。	部活動の活性化を重点目標の1つに掲げ、毎週水曜日を部活動の日と位置づけ、顧問も部活動の指導に当たりやすい環境作りを行った。大会成績などの結果として表れたものは少なかったが、学校全体の方向性は図られたように思う。来年度は講習会や講演会を増やし、活動への意欲向上を図りたい。
	体力測定記録の更新を各自に意識づけ、全学年を通じた体力の向上を目指す。	男子12分30秒以内、女子7分45秒以内の生徒が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	A 男子は74.6%、女子は68.2%が目標タイムをクリアした。	男子の平均タイムは1分42秒、女子は7分22秒で、昨年より男女ともやや下回った。持久走の記録向上は、体力向上のみならず、授業への意欲向上にもつながるので、来年度も、「体力アップ1校1プラン」の取り組みとして継続したい。
	生徒一人ひとりが充実感・達成感をもてる生徒会行事を、企画・運営する。	各行事終了後の感想として、充実感・達成感があったと答える生徒が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C 生徒へのアンケートでは70.9%であった。	個々の行事は盛り上がっているが、生徒全体の充実感、達成感という点では、まだまだ不十分であり、全員が行事にかかわれるような方向付けがさらに必要である。具体的には、アンケートによる生徒のニーズの確認や、生徒会広報誌の有効活用および生徒議会や各種委員会の場を増やすことが考えられる。
学校関係者評価委員会の評価	学習との兼ね合いを大切にしながら、部活動の活性化を図って欲しい。また、1つの学校でありながら、普通コースと芸術コースの交流があまりないようなので、もっと交流があってもよいのではないかと。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	どういう目標に向かって部活動に取り組むべきか、先生と生徒が一緒になって考え、共通の認識を持つ。3つのコースを持つ本校の特色、特に普通コースをアピールする工夫を、全校一丸となって取り組む。			
5 広報活動の充実 (広報活動をさらに活発化させ、学校理解を深め、地域に開かれた学校作りを推進する)	広報活動の拡充と開かれた学校作りの推進 カリヨンニュース等を充実させ、地域および地域の中学校との連携・理解を深める。	対前年度比の志願倍率が A 10%以上増加した。 B 5%以上増加した。 C ほぼ同じであった。 D 減少した。	B 一般入試の全体の志願倍率は、前年並みであったが、中国語専攻が激増した。	一般入試における志願倍率は0.99倍から1.04倍に増加したが、定員割れのコースもあり、さらに本校の日頃の取り組みを理解してもらおう粘り強い努力が必要である。芸術コースの取り組みを中心として、地域の中学校との連携は毎年深められている。
	ホームページをよりわかりやすいものに一新し、タイムリーな情報を発信する。	本校のホームページにおいて、情報の発信が適宜行われていると答える保護者、教職員が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	B アンケートでは、教職員が77.5%で、保護者は43.5%であった。(但し、保護者の39%が分からないと答えた。)	ホームページの更新がまだまだ不十分であり、タイムリーな情報発信を心がけたい。ただ、学校からの情報発信はホームページだけに限らないので、適切に情報発信を確認するための設問を検討し直したい。
学校関係者評価委員会の評価	ホームページを始めとする情報発信が必要な時代であるので、その発信の在り方をもっともっと研究して欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	情報発信する内容は豊富にあるので、タイムリに発信する。美術専攻生の卒業展示も、校外でも出来ないか検討する。また、中学校への説明は、教職員だけでなく生徒も活用し、本校の日頃の取り組みを理解してもらおう。			